

ホツマツタエ「ゆかりの地」を歩く フツヌシの姫神(妻)を捜して

吉 田 六 雄

フツヌシ(経津主)

ホツマツタエ文献を勉強し始めて少し馴染んでくると、ストーリー性のある「悪者退治」や「征伐もの」等に興味が注がれ、ついつい読み始めてしまう。その中で顕著な「悪者退治」は、ホツマツタエ-8 文の「魂返しハタレ討つ文」であろうか。また「征伐もの」は、ホツマ-10 文の「鹿島立ち釣鯛の文」、俗に云う「出雲の国譲り」であろうか。この 2 つの出来事に主役として、登場する人物がいる。その名前は、「フツヌシ」である。だがこのフツヌシには、「諱」が見つからない。ホツマツタエ文献や日本書紀を見ても、「経津主(フツヌシ)」と記載してあるが「諱」の記録がない。一方、古事記では「御名を伊波比主神(イハヒヌシのカミ)」としているが、この伊波比主神の名も「諱」ではない様だ。

何故に諱にこだわるかと云えば、「上古代」に「ハタレ征伐」や「出雲の国譲り」に活躍したフツヌシである。まして現在でも千葉県香取市の「香取神宮」の祭神として、祭られている神である。それにも関わらず「諱」が不明となると、知りたくなるのは当然であろう。またフツヌシの「父、母」も「ホツマツタエ」文献にも記載してない。更に「妻」の名も不明である。そんな中に故・松本先生は、フツヌシを「トヨケ(豊受神)」の子としている。その記載の寄り所は、ホツマ-10-24 文の「タカミムスビの 富み枯れお 除く門出の 鹿島立ち」と記載している所から、「トヨケの子」と推定されたのであろうか。

10-24 文

この旅は	タカミムスビの
富み枯れお	除く門出の
鹿島立ち	ハニスギ祀る
神議り	フツヌシ良しと

香取神宮を訪ねて

現在フツヌシは、香取神宮に祭られている。とは云ったが香取神宮の言葉を、初めて聞かれる人もいるでしょうか。香取神宮の所在地は、千葉県(旧)佐原市→(現)香取市香取である。横浜方面からのアクセスは、車にて東京湾のベイサイドを通る「横浜・狩場線」そして「横浜、東京・湾岸線」を利用し→「横浜ベイブリッジ」→「東京国際空港」→「有明テニスの森」を通過し→「千葉」を抜けて→「東関東自動車道」に入り→「成田」→「香取・佐原インター」で下車する。そして香取・佐原インターより約 5 分で、「香取神宮」に到着する。

香取神宮の入り口は大きな広場になっており、その中央部に車のロータリーがある。そのロータリー側より神宮境内を見ると、朱色で塗られた大きな第二鳥居がある。そしてその横に香取神宮と刻まれた巨大な石碑がある。香取神宮内へは、その鳥居をくぐり、鎮守の森にある幅広い参道歩いて行く。すると石の鳥居が見え、その奥に幅広く長い階段があり、その最上段の所に、朱色の大きな「総門」が現れる。総門を抜けると参道の流れに従い S 字状に歩く。すると次に朱色の「楼門」があり、楼門を抜けると正面に、香取神宮の勇壮な「拝殿」が現れた。この拝殿の屋根には特徴があり、二人羽織の姿で両手を大きく開いたような形状で、荘厳な屋根を呈していた。そして拝殿の奥には「御本殿」があった。その造りは桃山様式を取り入れた様式とのことで、「正面柱間三間の流造に後庇を加えた両流造り」と説明されていた。また屋根は檜皮葺とのことであつた。そ

して拝殿より「フツヌシ」にお参りした。

今回、香取神宮へお参りしたのは、お盆の連休の暑い日であった。夏の日差しは、鎮守の森の杉の木立より抜けて来ても、凄く暑く、また蝉の声と相まって「香取神宮」の一日を忘れることができなくなっていた。そして帰りに香取神宮の社務所より、「香取神宮小史(平成7年4月発行・73頁)」を頂いた。(一部に香取神宮小史またHPより引用した。)

香取神宮小史

「香取神宮小史」のページを開いて見て、少し驚くことがあった。それは上古代より「武勇の神」として崇められていた「フツヌシ」の功績の記載が、「出雲国の国譲り」のみだけであった。「フツヌシ」の活躍は、「出雲の国譲り」以外に「ハタレ征伐」での活躍が、ホツマツタエ文献に残されているが、香取神宮小史にはその記録さえなかった。

香取神宮小史(抜粋)

- (1)神徳の項に、「・・香取神宮は、経津主神をお祀りしてゐます。またの御名は伊波比主神。」と記載してあった。このことから、「香取神宮小史」の底本は、古事記と推定した。
- (2)功績の項には、「昔、天祖天照大御神が、日嗣の皇子天忍穗耳を芦原の瑞穂国の君主として天降しますにあたり、荒ぶる神々あまた争ひ、麻の如く乱れてゐた。天忍穗耳はその荒れたる中津国を見給ひ、天照大御神に報告されると、大御神は、八百万神に、いかにすべきか相談なされた。神々は、天穂日命がすぐれた神である。邪神を伐ちとらしに遣はし給へと申された。・・(略)・・ところが、この神は・・(略)・・大己貴命に・・媚びて・・復命しなかった。これではならじと、天稚彦を・・遣わされた。しかし・・復命しなかった。・・かうした度々の芦原中津国平定の功成らぬ末に、・・経津主こそふさわしいと申し上げた。・・この時、・・吾は丈夫に非ざらむや・・雄走神の子武甕槌神が申し出・・二神は、・・芦原中津国に天降り、出雲国・・・に着いて・・(略)・・」と、「出雲の国譲り」の当初の部分を用いたが、このように「出雲の国譲り」のみの功績だけが記載されていた。

神宮小史の年代考証

香取神宮小史に「・・天忍穗耳の芦原の瑞穂国の君主として天降します・・」との文が記載されているが、この文は本当に大己貴命の「出雲の国譲り」のできごとであろうか。また「出雲の国譲り」と「天忍穗耳の芦原への天降り」ではどちらが年代的に古いのであろうか。この疑問が出る度に、我ら「ホツマツタエ」研究者は、原典の「ホツマツタエ」文献に遡ることになる。そしてホツマツタエ文献より、「出雲の国譲り」と「天忍穗耳の芦原への天降り」の年代を、ホツマツタエの暦である「スス暦」で摘出することになる。すると「出雲の国譲り」の頃は、スス暦の25 鈴 93 枝のサアエ(37 穂)の頃(ホツマ-10 文)であった。また「天忍穗耳の芦原への天降り」の頃のスス暦は、26 鈴 16 枝 41 穂の頃(ホツマ-20 文)であった。

このスス暦で表した「鈴枝穂」の年を、わかりやすいように、西暦に換算すると、「出雲の国譲り」の頃は、紀元前1217年になる。また「天忍穗耳の芦原への天降り」の頃は、紀元前1199年になる。この年数の差は、18年になる。このように説明してくるともう結論を推測されているでしょうが、「出雲の国譲り」と「天忍穗耳の芦原への天降り」は、全く別々の「2つの出来事」であったことがわかってくる。この別々の出来事は、「香取神宮小史」が混同したわけではなく、その底本であろう「古事記」編纂時等に、混同させていたと推定される。そして「古事記」編纂者は、ホツマツタエのスス暦も充分理解しないまま編纂したための混同とも受け取れる。

香取の名の由来

「香取神宮小史」の「神宮・鎮座」の項の記載には、『神宮は遠き神代の昔より、今の地(下総国香取)に鎮座されてきたことは日本書紀に「此神今在東国香取之地也」とあることでも知られる。・・(略)・・』とある。そして日本書紀の編纂は、西暦720年と云われているので、西暦720年の頃にはもう「香取」の地名として存在したことになる。一方、「ホツマツタエ」文献を見ると8-91、92文に「フツヌシは 香具山お 司とれとて 香取神」とある。また8-90文には、「ハタレ征伐」で活躍した「イフキヌシ」および「タカミカツチ」も「フツヌシ」と同じように、御大神より名を賜る。その名は、「イフキヌシは、高野神」そして「タケミカツチは、鳴神」を賜ったとある。

8-90 文

イフキヌシ 宮を建つれば
鎮まるに ラシデ賜る
高野神

8-91、92 文

またフツヌシは
香具山お 司とれとて
香取神 タケミカツチは
鳴神に タケモノヌシの
頭椎剣と

このように御大神より名を賜るもとは、「ハタレ征伐」である。その「ハタレ征伐」は、「スス暦」の「24 鈴 998 枝 20 穂」になる。これを西暦に換算すると、紀元前1219年頃になる。一方香取神宮の社殿創立は、神武天皇18年(紀元前642年)と云われている。すると「香取」の名のもとになった「フツヌシは 香具山お 司とれとて 香取神」のホツマツタエ文は、香取神宮の創立より古く約577年前には、存在していたことになる。

フツヌシの姫神(妻)を捜して

フツヌシの系図は「ホツマツタエ」文献からは探れないが、フツヌシには唯一妹の「アサカ姫」(8-96文)がいる。そのアサカ姫は、「ココトムスビ(春日大社の神)」の妻として「カスガマロワカヒコ」(8-96文)を生む。そのカスガマロとフツヌシの出会いは、「かねて秀真と 日高見の境に出待つ フツヌシが 境迎ひして 初見糸 伯父と甥との 盃の 酒の眺めは 岩の上」(11-10,11文)とあり、現在の地名で云うと福島県と茨城県の県境で海岸端の高台にある「勿来関」になる。ここの岩の上で伯父(フツヌシ)と甥(カスガマロ、のちのアマノコヤネ)が、初めて合い酒を酌み交わしたと云うのである。

それにしてもこの酒を酌み交わしたのは、遙か昔の上古代のことであり、この状況は現在にも通じる風景であり、なんと素晴らしいことだろうか。それにしてもフツヌシの家族を捜すことは、限界があるのだろうか。「ホツマツタエ」文献に、限界があるのだろうか。それにしても上古代に「武勇の神」として崇められた人の痕跡は、本当に掴めないものであろうか。その疑問は1995年に初めて、香取神宮を訪問した年より続いていた。そしてある年、群馬の「榛名山」にキャンプに行った道中に、やっとフツヌシの妻である「姫神」が祭られている「神社」に出会うことになった。

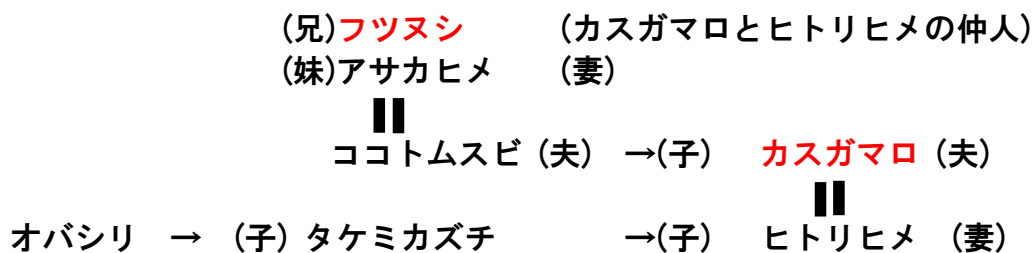
姫神を祭る神社

その神社の御祭神は、「経津主神」と「姫大神」となっている。そして神社のご由緒の御祭神の項には、「姫大神の御名は不詳ですが、おそらく綾女床(一之宮地方の古称)の神・・・と考えられている。」と記載している。

そして、この神社の御創建は、「社伝によると・・・安閑天皇元年(531年)3月と伝えている。」とある。そしてこの神社の所在地は、上野国の一之宮で、「一之宮貫前神社」と云う。現在の所在地は、群馬県富岡市一ノ宮になる。そして現在の社殿は徳川三代将軍の家光公の命により、西暦1635年に御造営されたとのことであり、本殿、拝殿、楼門は、国の重要文化財に指定されていた。またこの「一之宮貫前神社」のある場所は、全国でも珍しい地形の所にあった。参道は登りの階段で約30mになるであろうか、その頂きに朱色の鳥居がある。

鳥居を過ぎると、今度は下り坂になる。降りきった所に神社があり、楼門、拝殿、そして本殿の順で参拝者を迎えてくれた。そして「姫大神」の神社らしく、家族の安全を祈願する「金色の無事蛙」を社務所より載ってきた。

フツヌシとカスガマロとの伯父と甥の関係



藤原氏の祀る奈良の春日大社の祭神が、「フツヌシ」と「アマノコヤネ(カスガマロ)」である理由がわかってきますね。

(おわり)